

人と人との つながりが 海を守る

海洋環境専門家 木村 尚氏

◎プロフィール きむら・たかし

1956年神奈川県横浜生まれ。東海大学海洋学部卒業。NPO法人海辺つくり研究会理事・事務局長。東京湾をはじめ全国の海辺の環境再生に貢献している。著書に『都会の里海・東京湾』（中央公論新社）、『江戸前の魚 喰いねえ！—豊饒の海東京湾』（東京新聞出版部）など。日本テレビ系「ザ！鉄腕！DASH！！DASH 海岸をつくりたい」にレギュラー出演中。



東京湾のアマモ場 © NPO法人海辺つくり研究会

近年、東京湾を取り巻く環境が少しずつ改善され、さまざまな生きものが暮らせる海へと変化しています。東京湾を子どもたちが泳げる豊かで美しい海にしたいという思いから、アマモの移植やワカメの育成などの活動に長年取り組んできた木村尚氏に、海洋環境を守ることの大切さについてお話しいただきました。

気が付くといつも海にいた

——海に興味を持れたきっかけを教えてください。

木村 私は横浜生まれの横浜育ちなのですが、幼稚園のころから夏休みになると、一人で電車に乗って母親の実家がある石川県の能登に行っていました。近所の子どもたちと海で泳いだり、潜ったりしながら過ごしていました。気が付くといつも海にいました。

——海辺つくり研究会はどのような経緯で設立されたのですか。

木村 1979年に就職して、海洋調査コンサルタントの業務に携わっていました。汚染された東京湾が、排水規制によって少しずつきれいになり始めたところです。当時の市民活動は公害対策という考え方で「工事をやめろ！」「海を汚すな！」という声ばかり。私たちの年代は成田空港建設反対運動の最末期にあたり、反対運動をしても良い結果は生まれないことに忸怩たる思いを抱いていました。行政側も市民活動という反対運動という見方しかしていませんでした。市民と行政をとりもつ役割を果たしながら、何か具体的な活動が必要だと考えるようになりました。それで40歳になって、「人生80年とすると残り半分しかない。具体的な活動を誰もやらないなら、自分でやろう」と一念発起してそれまでの会社を辞め、2001年に海辺つくり研究会を設立しました。

文化的な役割を担っていた
アマモ

——木村さんがこれまでに取り組まれてきた活動について教えてください。

木村 1994年に参加したアメリカ土木学会主催のシンポジウムでは、ありとあらゆる市民の方が参加し、皆が均等に発表し議論していました。日本でもそのような場が必要と考え、海辺つくり研究会を設立して最初に企画したのが汽水域セミナーでした。汽水域とは淡水と海水が入り混じる区域のことで、生物にとって重要な場所です。このセミナー開催は川と海の境目、河川行政と港湾行政の境目、土木学会と建築学会の境目など、日本の社会では2つのものの隙間に問題が生じていると感じていたことが背景にありました。

続いて横浜港内のシーブルー事業では、ヘドロを浚渫し覆砂して、きれいな海底をつくることに携わりました。結構良い状態に戻りましたが、残念ながらメンテナンスの予算がつかず、継続できませんでした。そこで自分たちでモニタリングしながら、維持する方法として考えたのがアマモの移植とワカメの育成でした。

アマモは海中の浅い砂地に生える植物で、花を咲かせてタネをつけます。アマモ場はエビやマダイなどの稚魚が育つ格好の場所として海のゆりかごと呼ばれています。



種子



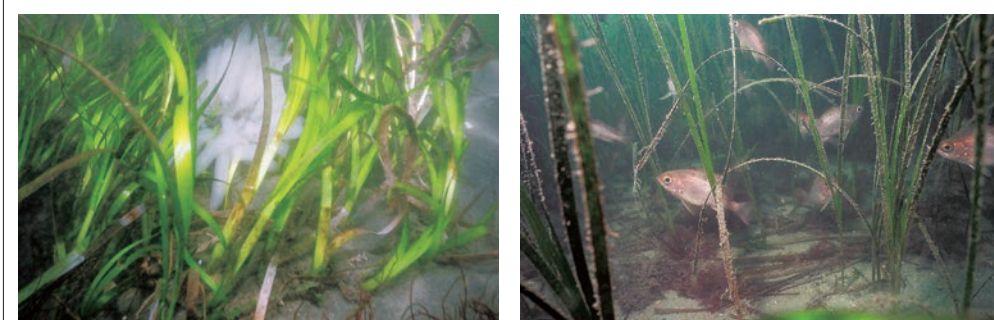
雌花



アマモの雄花

うみくき 海草のアマモはタネで増える種子植物で、ワカメやコンブなど胞子で増える海藻と異なり、砂や泥の海底に根(地下茎)をはって
かいそう 仲間を増やしていきます。春には海中で花を咲かせてタネを実らせませす。

© NPO法人海辺つくり研究会



アマモ場で産卵するアオリイカ(左)とアマモ場に潜むメバル(右)

© NPO法人海辺つくり研究会

アマモ場は多くの生きものたちのすみ家、えさ場、かくれ場、産卵場となっています。また光合成によりCO₂を吸収して酸素を供給、窒素やリンを吸収して水質や底質を浄化する役割も担っています。

CO₂を吸収して酸素を放出すると同時に、海底から窒素やリンなどの栄養も吸収してくれるので、海の環境を守る大切な役割を果たしています。

また、アマモは日本の文化に根付いた存在でもあります。万葉集以来しばしば和歌に詠まれていますし、三重県伊勢市の二見興玉神社では夫婦岩沖合のアマモを刈り取る藻刈神事が行われています。アマモは不浄をはらう無垢塩草として、お守りに入れて授与するほか、おはらいの神具に用いられています。古来より伊勢神宮参拝の前に二見浦で禊（みそぎ）を行う風習がありました。禊の代わりに無垢塩はらいが行われています。このようにアマモは自然と人と人をつなげる文化的な役割を担っていました。

皆さんの活動を後押し、輪をつなげ広げる

木村 アマモは水のきれいな浅い海に生息します。東京湾では水質悪化とともにアマモ場が姿を消し、魚介類も減少していき、アマモ再生の必要性が認識されるようになりました。アマモの移植イベントを、現在も横浜港南部の野島と海の公園で実施しています。秋になると多くの人たちが種まきの準備に集まり、その後のバーベキュー大会で懇親を深めています。自然に身を置くことでストレスが発散され、社員の健康に貢献することという観点から、参

——さまざまな活動を通して参加者同士のつながりが広がっているんですね。

木村 東京湾の事例を参考にしながら、取り組んでみたいという自治体も増えていきますし、すでに挑戦を始めている企業もあります。人と人とのつながりが広がることで、海は守られていくのだと思います。初めは水面に小石を投げたようなわずかな波紋でも、たくさんの人が一緒に動くとき大きな渦になります。その流れをつくっていくことが大切だと考えています。私たちが何かをするというより、皆さんの活動を後押しする形で、海を守るお手伝いをしています。



横浜市「野島公園」のアマモ

© NPO 法人海辺つくり研究会

加企業のなかには福利厚生費で参加しているケースも見られます。

また、アマモ場の再生や海の自然再生・保全のために全国の皆さんが意見交換をする会議「全国アマモサミット」を毎年実施し、活動の進展や地域社会との協働を促しています。今年は日本製鉄にも協賛してもらい、10月にそのプログラムの一部であった「海辺の自然再生・高校生サミット」を神奈川県横須賀市で単独開催しました。高校生がお互いの活動を学びあい、専門家からの助言を得ながら、それぞれの活動の質を高め、全国の仲間とのネットワークを広げていってほしいと願っています。こうした次世代の育成に貢献していきたいという企業が増えてきています。

10平方メートルの区画で始めたワカメの育成イベントは、今や数ヘクタールの規模に拡大しています。「マイワカメ」といって、種糸をロープに挟み込み、自分の名札を付けてもらいます。それを私たちが海に運び、筏に付けて浮かべておきます。2カ月経つと2メートルほどに成長します。収穫したワカメの総重量を計り、窒素やリン、炭素の回収量を計算し、東京湾をきれいにした数値を皆さんと共有しています。ワカメをお配りしたところ、「今までワカメを食べられなかった子どもが食べられるようになりました」というお礼状もいただきました。子どもたちが環境問題を通して、新鮮なワカメのおいしさを実感してくれたことを嬉しく思っています。

東京湾を世界遺産に！

——日本製鉄は鉄鋼スラグを使いCO₂を減らす藻場再生の取り組みも進めています。海洋環境を守るためには、何が重要だと考えていらっしゃいますか。

木村 鉄鋼スラグを用いた藻場再生技術を活用していくことも、海洋環境を守ることの助けになると思います。海の環境に良いことは積極的にやっていくのが良いと思っています。多くの人が食物連鎖のピラミッドが生態系だと考えています。しかし生態系とは、自然界のすべての生物が横並びで、脳のシナプスのように複雑につながり合い、そのなかに人間も含まれていると私は捉えています。生物が死滅するとシナプスが切れていく連鎖が生じます。その結果、人間の遺伝子にも異常が現れ、経済活動に影響を及ぼしかねなくなります。人間が生物である限り、自然は生きていくための重要なインフラの一つなのです。

東京湾周辺には日本の人口の4分の1が暮らしています。その人たちが海辺の自然と精神的に離れていったことが、結果として東京湾の環境を悪化させました。自然と人のつながりだけでなく、人と人のつながりも希薄化してしまいました。経済的な豊かさのなかで失われてしまったモラルを、利己ではなく利他という観点で考え直してみることが重要です。



夢ワカメ・ワークショップ

© NPO 法人海辺つくり研究会



© NPO 法人海辺つくり研究会



日本テレビ「日本列島ブルーカーボンプロジェクト」と連携

2024年5月11日、横浜市海の公園で日本テレビのアマモ場再生活動イベントが行われ、NPO 法人海辺つくり研究会は運営をお手伝い。木更津のアマモ苗300株が移植されました。

海を愛する人を応援しています

日本テレビ毎週金曜日20:54～21:00「ウミコイー今 海に出来ることー」では木村尚氏が監修を務め、日本製鉄はパートナー企業として協賛しています。
(日本製鉄CM放映中)



——今後の夢をお聞かせください。

木村 私の夢は東京湾を世界遺産にすることです。経済的に発展しながらも、そこに豊かで美しい海が広がっていたら、素晴らしいことです。これこそ持続可能な社会だと胸を張って世界に発信できます。日本が世界の見本になることは間違いありません。そのくらいの魅力が都会に面する東京湾にあります。

